

1. はじめに

平成 20 年 6 月 14 日 8 時 43 分、岩手県の南西部山岳地帯を震源とする $M_j=7.2$ の地震が発生し、最大震度 6 強を記録した。土木学会・地盤工学会・日本地震工学会・日本地すべり学会の 4 学会は合同調査団を組織し、地震の翌日 6/15 を中心に現地調査を行い、6/20 (9:20~11:30) に速報会を土木学会講堂にて開催した。ここではその速報会の概要を報告する。詳細は土木学会のホームページ



<http://www.jsce.or.jp/report/50/news3.shtm> をご参照いただきたい。

写真 1 満員の聴衆を前に発表する風間調査団団長

当日の参加者は約 4 5 0 人の多数にのぼり、会場に入りきらないほどであった(写真 1)。

2. 発表者と発表項目

土木学会古木専務理事の開会の挨拶に続き、下記 8 名の発表があった。

風間基樹 (東北大学、調査団団長) : 調査の概要、地すべり・斜面崩壊・土石流 (駒の湯の災害ほか)、調査のまとめ

後藤浩之 (京都大学) : 地震・地震動の概要

中村晋 (日本大学、調査団幹事長) : 建造物の被害 (トンネル・盛土)

運上茂樹 (土木研究所) : 建造物の被害 (祭時 (まつるべ) 大橋)

宮城豊彦 (東北学院大学、調査団幹事) : 地すべり・斜面崩壊・土石流 (荒砥沢ダム上流の地すべり)

吉田望 (東北学院大学、調査団副団長、日本地震工学会副会長) : 地すべり・斜面崩壊・土石流 (ロックフィルダムについて : 胆沢ダム、石淵ダム) (写真 2)

渦岡良介 (東北大学) : 地すべり・斜面崩壊・土石流 (荒砥沢ダム、他のダム周辺の地すべり被害)

最後に、地盤工学会浅岡会長より閉会の挨拶があった。

3. 発表概要

まず、合同調査団を組織するに至った経緯と調査地域・項目の紹介があった。地震動として非常に大きな加速度が上下方向に記録され、地震動の特徴として短周期領域に大きなパワーを持っているため、建造物よりも地盤に災害を引き起こしやすいとの指摘があった。実際、建造物の被害は目立たず、地すべりによって建造物が損傷・破壊した事例が紹介された。



その地すべり災害は過去に地すべりを起こした場所で再発していることが示された。斜面崩壊は大中小、さまざまな規模で生じており、法面对策工が有効であった事例やそうで

なかった事例が紹介された。荒砥沢ダム上流の地すべり、駒の湯の土石流の調査結果も報告された。さらにロックフィルダムの被害や、せき止め湖を作った地すべりについても報告された。

会場から地すべりに対する水の影響について質疑があり、また産業総合研究所による地震断層調査速報についての話題提供があった。

最後に今後の学会活動に対する提言が紹介され、活発で熱気あふれる速報会を閉会することとなった。

(文責：勝俣英雄：総務理事・大林組)